

北京の看板①

当館は136点の中国看板資料を所蔵しており、その大部分は1940年に北京で収集されたものである。現在街頭で見られる多くの看板には商品名や商店名が描かれている。このような看板を中国語で「招牌」という。しかし、かつて北京で使用された看板には文字をほとんど描かないものがあり、これらは「幌子」（または「望子」と呼ばれた。当館所蔵資料の多くは「幌子」である。

現在の看板は長方形のものが多く、幌子は実にさまざまな形状をしている。ただし基本的には文字を用いないため、現在の我々が見ると、どのような商品を取り扱う店なのか分からない場合がある。その中で最も理解しやすい幌子は、商品そのまま吊り下げた「実物幌子」であろう。綿屋なら綿を、靴屋なら靴をそのまま幌子にするので一目瞭然だ。その他、商品の模型を掲げる「模型幌子」もある。刀剣を売る店は木製の刀剣模型を幌子にしている。これも分かりやすい。逆に、謎解きに近い「象徴幌子」という幌子もある。例えば図1は飲食店の幌子だが、これだけでは何の店か分からない。しかし当時の北京人は見慣れていたので、特に支障はなかったようだ。

なぜ文字を描かない幌子が使用されたのだろうか？一説には、当時の北京では識字率が低く、文字が読めない人が多かったからと言われている⁽¹⁾。しかし文字を描く「招牌」も多く存在していたので、これだけが理由とは思えない。

戦前の旧満州でも幌子は見られたが、現地に住んでいた方の話によると「独特の形をしている幌子は遠方からの認識が容易」であったという。また、筆者は2006年に黒龍江省ハルピン市で、図1と同形の幌子が掲げている姿を実見したことがある。この時、歩行者から見た幌子は、意外に目立つものであると感じた（図2）。文字のある看板「招牌」よりも幌子の方が、実際は宣伝効果が高いのかもしれない。

当館の幌子の収集は、二代真柱・中山正善の発意により始まった。中山はルイーザ・クレーン著『CHINA IN SING AND SYMBOL』（1926）を読んで幌子に興味を持ち、福原登喜にその収集を命じた。しかも新品の幌子ではなく、店頭に掲げられているものを特に望んだという。

福原はどのようにすれば「使用中」の幌子を手に入れるか見当が付かず、途方に暮れた。仕方無く近くの食堂に入り、「店の前の看板を売ってくれ」と頼んでみたが、「うちは看板を売るほど貧乏していない。失礼なことを言うな！」と追い返されてしまった。各店で同じようなことを言われ困惑していたところ、馴染みの骨董商が協力を申し出た。彼は、わずか2カ月で143点の幌子を手に入れた。福原は非常に驚き、どのような方法で幌子を集めたのかを尋ねると、骨董商は「各店主に新品の幌子を買えるだけの金額を支払い、その代わりに店頭の幌子を譲り受けたのだ。」と答えた。これらを北京から船で神戸港へ移送し、神戸からは陸路で天理まで運んだ。各幌子は意外に大きく、かさばる上に点数が多いため、運搬中の苦労は大変なものであったらしい。

無事持ち帰った資料には、腸詰め（いわゆるソーセージ）をそのまま「腸詰め屋の幌子」としたものが等も含まれていた。一度は収蔵したが、ネズミに囓られるなど不測の事態が発生した。そこで長期保存が不可能であることを悟り、泣く泣く「腸詰め

屋の幌子」を含む数点を廃棄した。このようなアクシデントの他にも、太平洋戦争時の混乱や当館の度重なる移転などの理由により、1940年に収集した幌子の一部はすでに失われている。

その後、子寿里庫コレクション⁽²⁾の一部として購入したものが9点、福原がのちに台湾や広州市で集めたもの等数点が加わり、2012年現在は計136点の幌子がある。このうち46点を当館1階で常設展示している。

幌子は、当時の中国大陸では普遍的なものであった。そのため、1940年代以前に中国人が深く研究したり、関連著書を出版する例は少なかった。しかし幌子はむしろ外国人から好奇の目で見られ、20世紀前半には外国人による著作が発表されている⁽³⁾。近年は中国人研究者も増え、曲彦斌『中国招幌辞典』（1997）などの優れた研究もある。

20世紀の中頃以降、幌子は徐々に街頭からその姿を消していく。特に1949年の中華人民共和国成立後はほぼ見られなくなった。その理由は不明だが、新国家の都市開発を進めるなかで、軒先に突き出た幌子が交通や美観の妨げになると考えた政府が撤去を命じたのかもしれない。現在、筆者の知る限りでは、黒龍江省ハルピン市で食堂の幌子がわずかに残る程度である。

近年、北京の有名な庭園「頤和園」に清時代の商店が復元された。各商店の店頭には幌子の模型が吊り下げられ、1940年当時の景観を偲ぶことができる。しかし現存する幌子の大部分はこのような復元模型となっており、伝世品はごく僅かである。筆者は当館以外の施設に於いて、まとまった実物の幌子コレクションを見たことがない。但し中国には幌子が数多く残存すると思われるので、今後の発見に期待したい。

以上、当館所蔵幌子の概要と収集の経緯について述べた。今回は各資料を具体的に紹介する。

【註】

- (1) 黒崎文吉編『満商招牌考』（1940）、182-183頁。
- (2) 岸本汽船社長であった岸本五兵衛[1897-1946]のコレクション。戦前の中国大陸（主に旧満州）の郷土玩具2000点、民俗資料約160点、東南アジア資料約180点。その他ニューギニア資料なども含まれる。
- (3) 前出のルイーザ・クレーン『CHINA IN SING AND SYMBOL』（1926）、黒崎文吉編『満商招牌考』（1940）をはじめ、ジャパントーリストビューロー編『満州看板往来』（1940）、宮尾しげを『支那街頭風俗集』（1939）など。

図1 飲食店の幌子 1940年、北京にて収集 天理参考館蔵

図2 黒龍江省ハルピン市にある飲食店の幌子。「老砂鍋居」看板の右下に幌子が2つ見える（2006年筆者撮影）。



図1

図2